

療法などの集学的治療を行っており、さらに手術不能例に対する CT ガイド下肺腫瘍ラジオ波焼灼療法も実施しています。

肝がんについては、外科療法が中心に行われており、腹腔鏡下肝切除術、生体肝移植も実施しています。また、抗がん剤の動注化学療法とインターフェロン併用治療も行っています。学会専門医数や肝炎治療の実績、肝疾患診療医療機関との連携の実績により、大阪府の肝疾患診療連携拠点病院に指定され、肝疾患に対する指導的役割を担っています。

胃がんについては、早期がんに対する内視鏡下粘膜切除術、腹腔鏡下手術を実施するとともに、抗がん剤感受性試験を導入しています。

大腸がんについては、早期がんに対する内視鏡治療、進行がんに対する腹腔鏡下手術を行うとともに、直腸がんに対して肛門温存手術も実施しています。

乳がんについては、放射線科、病理、形成外科と連携し、センチネルリンパ節生検、乳房温存、術前術後の放射線化学療法などを行っています。

このように同病院では5大がんをはじめとするがんに対する高度先進医療を提供しています。

人口約250万人を抱える大阪市二次医療圏では、地域の医療機関との連携を行っている大阪市立総合医療センター、大阪赤十字病院及び大阪府立急性期・総合医療センター〔いずれも地域がん診療連携拠点病院〕と高度先進がん治療を行っている大阪府立成人病センター〔都道府県がん診療連携拠点病院〕に加え、地域における診療、教育研修、がん研究・先進治療の核である大阪市立大学医学部附属病院〔特定機能病院〕が指定されることにより、それぞれの病院が有する機能を十分に発揮できる環境が整備されます。このことにより、医療圏内のがん診療の質の向上とがん診療の連携協力体制の整備が一層図られます。

## (2) 大阪大学医学部附属病院

① 二次医療圏名 豊能二次医療圏

② 推薦理由

大阪大学医学部附属病院は、豊能二次医療圏の大都市である吹田市に立地しています。北河内二次医療圏の門真市から三島二次医療圏、豊能二次医療圏を経て大阪空港（兵庫県伊丹市）を結ぶ大阪モノレールの支線であり、三島二次医療圏の茨木市の北部への延伸がなされた彩都線「阪大病院前」駅が最寄の駅です。近隣には、基幹交通の大動脈である名神高速道路、中国自動車道路及び近畿自動車道路の結節点である吹田ジャンクションと吹田インターチェンジがあり、一般道路として近畿自動車道と並行する大阪中央環状線の他、豊能二次医療圏南部と三島二次医療圏南部を横断する国道171号線が走っています。さらに、国道423号線を利用すれば、大阪市中心部から所要時間約30分で同病院に到達できます。

このように、同病院は、豊能二次医療圏の府民のみならず、三島二次医療圏、

大阪市北部地域の府民が利用しやすい立地位置にあります。

こうした立地条件もあり、平成 12-14 年のがん登録データからがん患者の動向を見ると、豊能二次医療圏のがん患者が同病院を受診している割合は 5.4%、三島二次医療圏の患者では 3.8%、北河内二次医療圏の患者では 0.6%、大阪市二次医療圏の患者では 0.4%を占めています。同病院は豊能二次医療圏の新発がん患者の治療のみならず大阪府北部地域の新発がん患者の治療も担っています。

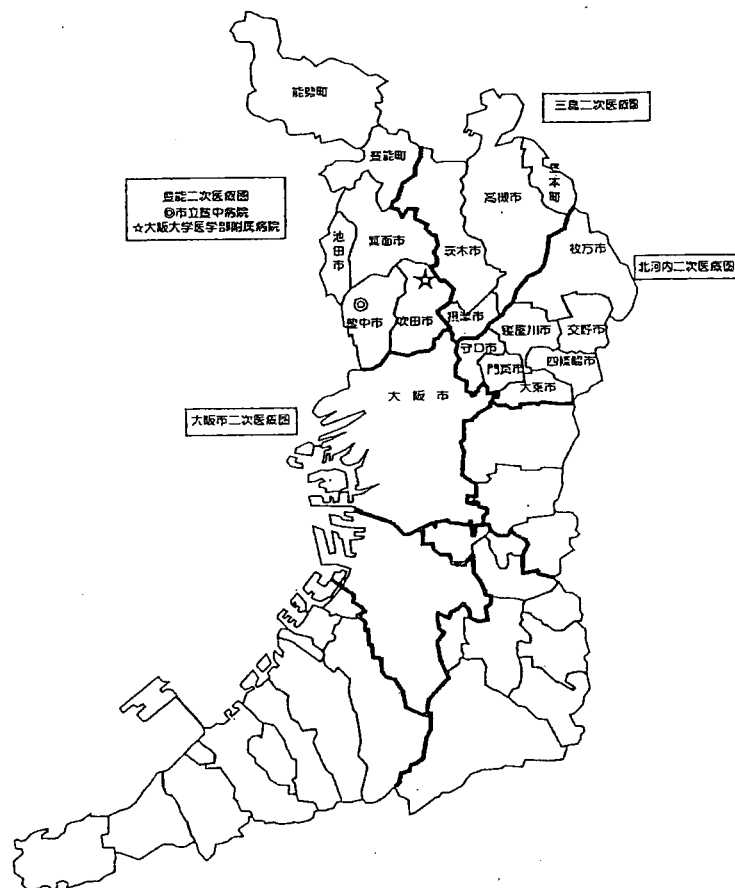
また、同病院は、平成 13-15 年のがん登録データから見ると、肺がんについては、市立豊中病院〔地域がん診療連携拠点病院〕に次いで多い 62 人の患者数となっています。肝がんについては、市立豊中病院に次いで多い 76 人の患者数となっています。

なお、大阪府が調査した同病院の豊能二次医療圏の平成 19 年度入院肺がん患者数は延べ 139 人、入院肝がん患者数は延べ 189 人となっています。

がん診療への主な取り組みは、肺がんについては、胸腔鏡下手術や術後の放射線化学療法などの集学的治療を行っており、さらに肺移植手術についての実績があります。また、がん患者の症状に応じて分子標的治療薬による治療や、従来の抗がん剤や放射線治療が効かなくなった症例を対象として先進的なワクチン療法を試みています。

肝がんについては、その原因となる C 型・B 型慢性肝炎の治療について、世界の中心的な役割を果たしています。また、抗がん剤の動注化学療法とインターフェロンを併用した新しい治療法やラジオ波焼灼療法、肝動脈塞栓療法、抗がん剤感受性試験をはじめとする集学的治療を実施するとともに、生体肝移植も実施しています。学会専門医数や肝炎治療の実績、肝疾患診療医療機関との連携の実績により、大阪府の肝疾患診療連携拠点病院に指定され、肝疾患に対する指導的役割を担っています。

胃がんについては、低侵襲治療、縮小手術（内視鏡下粘膜切除術、腹腔鏡下手術）を実施しています。進行がんの治療後の再発形式として最も多い腹膜播種に



対する治療法を改善するため、腹膜播種再発を予測する検査法を開発し臨床応用しています。抗がん剤感受性試験も取り入れています。

大腸がんについては、早期がんに対する内視鏡治療、進行がんに対する分子標的薬療法や腹腔鏡下手術を行うとともに、直腸がんに対してTEM(Transanal endoscopic microsurgery)も実施しています。また、ワクチン療法や抗がん剤感受性試験も取り入れています。

乳がんについては、内視鏡下乳房温存術、センチネルリンパ節生検、形成外科による乳房同時再建術などを取り入れ、化学療法では、術後補助療法だけでなく術前のネオアジュバント療法、ワクチン療法や抗がん剤感受性試験も行っています。

このように同病院では5大がんをはじめとするがんに対する高度先進医療を提供しています。

豊能二次医療圏では、地域の医療機関との連携を行っている市立豊中病院〔地域がん診療連携拠点病院〕に加え、地域における診療、教育研修、がん研究・先進治療の核である大阪大学医学部附属病院〔特定機能病院〕が指定されることにより、それぞれの病院が有する機能を十分に発揮できる環境が整備されます。このことにより、医療圏内のがん診療の質の向上とがん診療の連携協力体制の整備が一層図られます。

### (3) 大阪医科大学附属病院

① 二次医療圏名 三島二次医療圏

② 推薦理由

大阪医科大学附属病院は、三島二次医療圏の大都市である高槻市に立地しています。大阪・梅田から大阪市北部、三島二次医療圏の茨木市、高槻市等を経て京都府を結ぶ阪急京都線「高槻市」駅及びJR東海道本線「高槻」駅が最寄の駅です。基幹道路として、北河内二次医療圏とを結ぶ国道170号線、三島二次医療圏と豊能二次医療圏を横断する国道171号線等が走っています。

このように、同病院は、三島二次医療圏の府民のみならず、北河内二次医療圏、豊能二次医療圏、大阪市北部地域の府民が利用しやすい立地位置にあります。

こうした立地条件もあり、平成12-14年のがん登録データからがん患者の動向を見ると、三島二次医療圏のがん患者が同病院を受診している割合は10.2%、北河内二次医療圏の患者では0.7%、豊能二次医療圏の患者では0.4%、大阪市二次医療圏の患者では0.3%を占めています。同病院は三島二次医療圏の新発がん患者の治療のみならず大阪府北部地域の新発がん患者の治療も担っています。

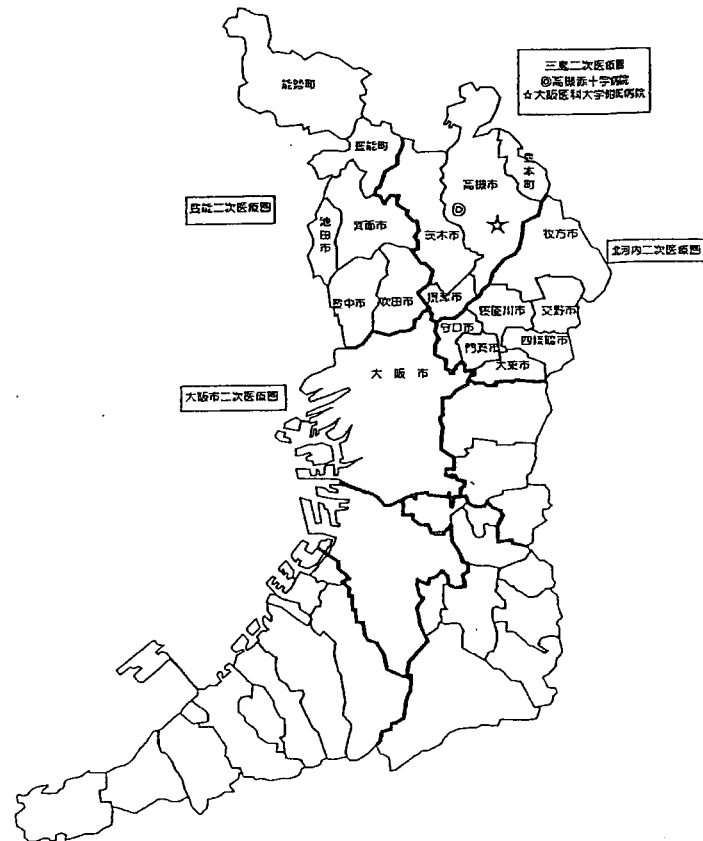
また、同病院は、平成13-15年のがん登録データから見ると、肺がんについては、高槻赤十字病院〔地域がん診療連携拠点病院〕に次いで多い121人の患者

数となっています。肝がんについては、高槻赤十字病院に次いで多い60人の患者数となっています。

なお、大阪府が調査した平成19年度における同病院の三島二次医療圏の入院肺がん患者数は延べ330人、入院肝がん患者数は延べ212人となっています。

がん診療への主な取り組みは、肺がんについて、胸腔鏡下手術や術後の放射線化学療法などの集学的治療を行っています。

肝がんについては、抗がん剤の動注化学療法とインターフェロンを併用した新しい治療法やラジオ波焼灼療法、肝動脈塞栓療法、抗がん剤感受性試験をはじめとする集学的治療を実施するとともに、生体肝移植も実施しています。学会専門医数や肝炎治療の実績、肝疾患診療医療機関との連携の実績により、大阪府の肝疾患診療連携拠点病院に指定され、肝疾患に対する指導的役割を担っています。



胃がんについては、特に内視鏡治療について早期がんに対する内視鏡下粘膜切除術、3D-CT画像を活用した腹腔鏡下手術を実施するとともに、抗がん剤感受性試験を導入しています。また、再発・進行がんに対してTS-1とシスプラチンを併用した化学療法に実績を上げています。

大腸がんについては、早期がんに対して内視鏡治療を行うとともに、進行がんに対しては3D-CT画像を活用した先進的な腹腔鏡下ナビゲーション手術を行うなど、内視鏡治療について世界的にもトップクラスの実績をあげています。また、抗がん剤感受性試験や直腸がんに対する肛門温存手術を実施しています。

乳がんについては、乳腺外科グループが中心となり、放射線科、病理と連携し、センチネルリンパ節生検、乳房温存、術前術後の放射線化学療法などを行っています。

このように同病院では5大がんをはじめとするがんに対する高度先進医療を提供しています。

三島二次医療圏では、地域の医療機関との連携を行っている高槻赤十字病院〔地域がん診療連携拠点病院〕に加え、地域における診療、教育研修、がん研究・先進治療の核である大阪医科大学附属病院〔特定機能病院〕が指定されることによ

り、それぞれの病院が有する機能を十分に発揮できる環境が整備されます。このことにより、医療圏内のがん診療の質の向上とがん診療の連携協力体制の整備が一層図られます。

#### (4) 近畿大学医学部附属病院

① 二次医療圏名 南河内二次医療圏

② 推薦理由

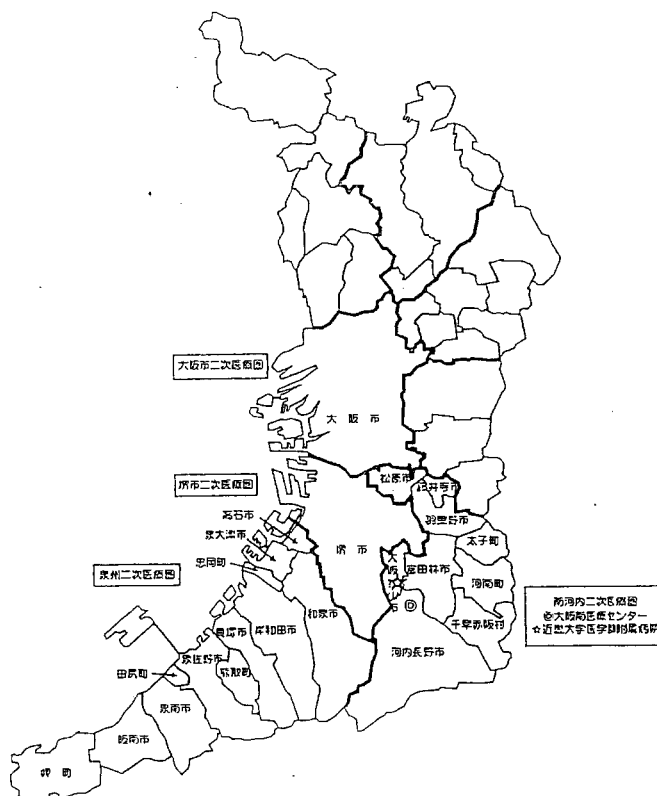
近畿大学医学部附属病院は、南河内二次医療圏の大阪狭山市に立地しています。大阪・なんばから大阪市南部、堺市、南河内二次医療圏の大阪狭山市、河内長野市等を経て和歌山県を結ぶ南海高野線「金剛」駅及び南海高野線と相互乗入を行っている堺市と和泉市を結ぶ泉北高速鉄道「泉ヶ丘」が最寄の駅です。基幹道路として、泉州二次医療圏と南河内二次医療圏を結ぶ国道170号線、堺市と和歌山県橋本市を結ぶ国道310号線、富田林市と泉州二次医療圏を結ぶ府道が走っています。

このように、同病院は、南河内二次医療圏の府民のみならず、堺市二次医療圏、泉州二次医療圏、大阪市南部地域の府民が利用しやすい立地位置にあります。

こうした立地条件もあり、平成12-14年のがん登録データからがん患者の動向を見ると、南河内二次医療圏のがん患者が同病院を受診している割合は17.9%、堺市二次医療圏の患者では13.6%、泉州二次医療圏の患者では6.7%、大阪市二次医療圏の患者では0.4%を占めています。同病院は南河内二次医療圏を含む大阪府南部地域の医療圏の新発がん患者の治療も担っています。

また、同病院は、平成13-15年のがん登録データから見ると、肺がんについては、大阪府立呼吸器・アレルギー医療センターに次いで多い228人の患者数となっています。肝がんについては、最も多い226人の患者数となっています。

なお、大阪府が調査した平成19年度における同病院の南河内二次医療圏の入院肺がん患者数は延べ171人、入院肝がん患者数は延べ198人となっています。



がん診療への主な取組みは、肺がんについて、胸腔鏡下手術や術後の放射線化学療法などの集学的治療を行っており、従来の抗がん剤や放射線治療が効かなくなった症例に対する先進的なワクチン療法などにも取り組んでいます。

肝がんについては、進行がんに対する動注化学療法とインターフェロン併用治療や塞栓療法、分子標的治療の開発など抗がん剤治療を行っています。特に、ラジオ波治療について、ラジオ波焼灼療法を平成11年より全国に先駆けて取り入れ、症例数は2,000例以上と全国で2位の症例数であり、かつ、優れた治療成績を上げています。学会専門医数や肝炎治療の実績、肝疾患診療医療機関との連携の実績により、大阪府の肝疾患診療連携拠点病院に指定され、肝疾患に対する指導的役割を担っています。

胃がんについては、早期がんに対する内視鏡下粘膜切除術、腹腔鏡下手術を実施するとともに、抗がん剤感受性試験を導入しています。

大腸がんについては、機能温存直腸がん手術に力を入れ、がん患者のQOL向上を図っています。

乳がんについては、乳腺外科が中心となり、センチネルリンパ節生検や術前術後の放射線化学療法など術後のがん患者のQOL向上のため、先進的な治療に取り組んでいます。

このように同病院では5大がんをはじめとするがんに対する高度先進医療を提供しています。

南河内二次医療圏では、地域の医療機関との連携を行っている大阪南医療センター〔地域がん診療連携拠点病院〕に加え、地域における診療、教育研修、がん研究・先進治療の核である近畿大学医学部附属病院〔特定機能病院〕が指定されることにより、それぞれの病院が有する機能を十分に発揮できる環境が整備されます。このことにより、医療圏内のがん診療の質の向上とがん診療の連携協力体制の整備が一層図られます。

## 第4 効果

### (1) がん診療連携拠点病院におけるがん患者の治療割合の向上

今年度、大阪府が推薦する4病院が地域がん診療連携拠点病院として指定されることにより、平成12-14年のがん登録データから算定したがん診療連携拠点病院での主治療を受ける割合は、大阪市二次医療圏の患者では31.2%、堺市二次医療圏の患者では33.0%、豊能二次医療圏の患者では28.9%、三島二次医療圏の患者では25.8%、北河内二次医療圏の患者では28.1%、中河内二次医療圏の患者では38.2%、南河内二次医療圏の患者では42.7%、泉州二次医療圏の患者では41.0%、大阪府全体では32.8%となります。これに、4病院ががん診療連携拠点病院の指定を受けることにより患者数

が1.3倍(※)に増加すると推計すると、大阪市二次医療圏の患者では33.4%、堺市二次医療圏の患者では37.5%、豊能二次医療圏の患者では31.3%、三島二次医療圏の患者では30.0%、北河内二次医療圏の患者では28.7%、中河内二次医療圏の患者では39.5%、南河内二次医療圏の患者では49.3%、泉州二次医療圏の患者では43.6%、大阪府全体で34.6%となります。

これにより、府が考えている、がん診療連携拠点病院での治療割合が全国平均(推計)を上回ることについては、北河内二次医療圏を除いて達成することが見込まれます。なお、北河内二次医療圏は推薦候補であった関西医科大学附属枚方病院が指定されることにより、達成が可能となります。

※ がん診療連携拠点病院の指定による患者数の増加率  
大阪府立成人病センターにおける指定前の平成14年新発がん患者数3,000人と指定後の平成15年新発がん患者数3,954人を比較し、1.3倍と算定しました。

## (2) オンコロジーセンターネットワークの形成

現在、大阪府では、すべての二次医療圏に地域がん診療連携拠点病院があり、標準的治療を提供する体制にはありますが、今回大阪府が地域がん診療連携拠点病院として推薦する病院が指定されることにより、肺がん、肝がんをはじめとするがんの標準的治療の提供体制の一層の強化が図られます。

さらに、今回、大阪府が推薦する病院がいずれもオンコロジーセンター機能を有する特定機能病院であることから、特定機能病院である大阪府立成人病センター(都道府県がん診療連携拠点病院)を加え、大阪府域全体を重畳的にカバーする特定機能病院オンコロジーセンターネットワークが形成され、それぞれが立地する二次医療圏域を超えて大阪府全体にがん患者への最新・高度先進医療の提供が行われることが期待できます。(別紙「大阪オンコロジーセンター支援構想(仮称)」参照)。

また、推薦病院が地域がん診療連携拠点病院の指定を受けることにより、特定機能病院の特性の一つである人材育成機能が活かされ、地域医療の人材の確保・充実、技術支援・連携も期待できます。

## 第5 まとめ

がんは申すまでもなく、国民、大阪府民の健康の最大の脅威であり、がんにかかることは本人、家族にとって精神的、身体的、社会的に非常に大きな苦痛をもたらすものであり、ひいては我が国、大阪府にとって社会的、経済的に大きな損失をもたらすものです。

大阪府は、この度、府のがんをめぐる状況等を踏まえ「大阪府がん対策推進計画」に基づき4病院を地域がん診療連携拠点病院として推薦しました。これらの病院が指定されることにより、人口並びにがん診療に取り組む医療機関が多い、大阪府の地域特性を

活かした高い水準のがん診療連携体制を整備し、大阪府民に質の高いがん医療を提供することができ、死亡率の改善が図られます。

さらに、このことは大阪府のみならず我が国にとってがんに関する状況の改善に大きく寄与するものであると考える次第です。



# 大阪府におけるがん診療連携体制 ～大阪オンコロジーセンター支援構想（案）～

特定機能病院が有するオンコロジーセンター機能を活用することにより、都道府県がん診療連携拠点病院である大阪府立成人病センターとの連携協力の下、大阪府域全体にわたりがん患者に対する医療提供の充実が期待できる。

